

人間生物学のめざすもの

蒲原春一

1

春休みに入り、卒論の内容を決めなければならぬ三年ゼミのある学生が「自然人類学というものの性格がまだよくわからぬ」というようなことをいっているのを耳にした。今頃になって困ったものだとは思ったが、これはある程度やむをえないことかも知れない。

そもそも、この学問自体歴史的には若い学問で、とくに第二次大戦以降、米国で文化人類学のブームが起ってから一般にも知られるようになり、米国では人類学といえは文化人類学そのものを指し、自然人類学と区別している。ところが、ドイツをはじめヨーロッパでは人類学すなわち自然人類学を意味し、文化人類学を民族学と呼ぶようで、このような名称の不統一も人類学のイメージを定着させない一因かもしれない。この学問の定義づけを困難にしている別な原因は、種々の教科書、入門書などを読んで気付くように、その内容もまちまちが多く、これは取扱う範囲がきわめて広汎で包括的な学問であるため、十分に体系化されていないゆえとも考えられる。

人類学とは人間に関する総合科学であり、人類を対象とした研究を行うことに問題はない。英語の Anthropology はギリシヤ語の anthropos 即ち「人間」に由来する語で、「人間学」ということになるが、昔から哲学の一部として人間の本性や宇宙における哲学の一部として人間の本性や宇宙における位置などの問題について思考する学問があつて、こちらを「人間学」と呼んでいるので、これに対し、人間の科学的研究の方を「人類学」と呼ぶことになつてゐるようである。このような歴史的哲学観は別として、「人類」と「人間」を意識的に使い分ける必要はなさそうである。文化学科が創設されるさい、新に自然人類学を開講担当するよう要望を受けたが、私自身ながらくたさずわつてきた専門は生物学で、とくに動物実験形態学という領域でもあるし、果してお引受けできるものかどうか迷つた。

学科設立の主旨にもあつたが、すべての学問は人間を離れて存在しないし、まず学問をする人間そのものについて理解しなくてはならない。とくに「文化」について学ぶことが重要な文化学科においては、その人間が創り出した文化について学ぶことが重要な目標であることはいうまでもないが、文化を創り出す人間その

ものを理解するための学問も不可欠である。人類学という学問は車の両輪のように、人間の創り出す文化を中心とした文化人類学と、その人間を自然科学の分野で研究する自然人類学の双方が並立してはじめて完全なものとなる。

それならば、人間も生物の一員である以上生物学的な立場から人間あるいは人類を理解することが自然人類学の面でも不可欠の要素となると考え引受けることになった。したがって、制度上は文化人類学に対応して自然人類学なる名称を使ったが、その内容はいわゆる Human Biology 「人間生物学」または「人類生物学」と考えてもさしつかえないし、その方が内容を理解し易いのではないかと思っている。

自然人類学なる講義の開かれていた大学は主に少数の国・公立大学で、私立大学にごくわずか見られる程度だが、その内容を見ても、またこの学問の傾向からも、とても他と同じような内容そのまま跡見で行うことは不可能だし、それが適切な方向とも思えない。第一、スタッフはただ一人、施設といえは生物学関係の実験器具・文献などを大学設立以来少しづつではあるが備えてきたので、此等を何とか活かして跡見文化学科独自の自然人類学を確立したいものと常々心掛けていた。

2

人類は動物界を構成する一員ではあるが、自然人類学は勿論動物学の一部門でもなければ、人間の持つ諸現象を生物学のレベルだけで理解できるものでもない。自然科学の方法は、記載・分析・法則確立が重要な目標とされているが、なかでも生物学の分野

では「生命」が対象となるので、物理学や化学のように機械的現象に限って扱うことはできない。

そこで、人間を科学的に学ぶためには、人間は他の動物と比較して、どのような存在であるのかをよく見きわめながら、まずその方法を考えていかねばならない。そこで始めて、「人間生物学」という学問も成立するはずである。もちろんこのような学問は確立したものでなく、その定義も確たるものはない。しかし、生物学的な立場から人間をみる必要性は、文化の発達した今日もますます高まりつつあることは確かである。

人間に最も接触の深い自然科学といえは医学があげられる。しかし、医学が人間研究にとって最も代表的な科学とは考えられない。もちろん、医学も範囲は広く、基礎分野においては正常な人間の生命現象を追求の対象とするだろう。だが、医学の本来の目標は異常であり、疾病が対象である。では正常と異常の間にはどれほどの差が求められるのだろう。人間研究の難しい点の一つは、種間変異の大きいことであって、平均値や正常値だけで現わされるものではないことである。

人間についての科学はすべて人間が対象となることに変りないが、人類学以外の人間に内する科学では人間の存在を前提とし、その詳細を明らかにしようとする。つまり、人間は本質的に一つの同じものと考えている。

ところが、人類学の立場では、人間の変異―多様性を認め、本質的に同じものと見ていない。人間は種々多様なものであることが前提となり、その多様性を追求し、場合によっては、多様性のなかから共通性を見出そうとするのである。文化学としての人類

学も、生物学としての立場からも同様で、このような認識に立つて文化人類学・自然人類学も成立している。したがって、人間に関する科学の存在する処では、どこでもそれに対する人類学が成立するわけで、文化人類学・自然人類学は申すに及ばず、経済人類学・社会人類学・言語人類学・音楽人類学など多くの人類学が成立する。

人間の多様性が人類学の前提であることを述べてきたが、この多様性すなわち個体間にも見られる変異は一方では進化の要因ともなり、人類では変異の大きいことが進化のきわめて著しい事実を物語っている。人類も生物の一構成員である以上、自然的な存在系統の上に立つものとして見るべきで、当然進化の結果として考えねばならない。ある意味では、ヒトは進化の頂点に達しているとも考えられていて、確かに動物進化の系統図を見ると、原始的動物から出発し、その最終的到達点に人間が位置していることが示されている。

しかし、このことを価値観の問題と混同してはならない。進化系統図をよく見ると、極点に到達しているのは人間だけではなく、分枝した系統には他にもいくつかの極点に達した動物のいることが分る。ただ、人間は他の系統と違って独特な進化の道を行ってきたので、この問題を追求することも「人間生物学」の一つのポイントといえよう。進化的に見て、いつ、どこで、どのようにしてヒトと呼ばれるにふさわしい動物が生れたかということも重要な問題であるが、人間に関する知識が増大するに従って必ずしも焦点が定まらなくなってきているような感もある。現存する人類が多様であるように、過去の人類の祖先も多種あり、人間とし

ての特徴を限定することが難しい場合も考えられる。

3

一般に、進化の立場から人類の特徴としてあげられている点は直立二足歩行・大脳の発達・環境適応性などいろいろある。いづれも大変重要な問題で、人間を理解するためには避けられないテーマであろう。私たちも自然人類学コースを選択する場合、まず最初に人間の進化についてとりあげ、ヒトと呼ばれる動物がどのようにして誕生したかを考えることにしている。さらに、人間の特徴は大脳の発達とも関係して「文化を持つ動物」といわれることであり、この、自ら作り出した「文化」によって、自らの進化の方向を変えていることに注目しなければならぬ。生物の特徴として人間のもつ文化を握えるならば、それは個体維持と種族保存すなわち食と性に関する現象として説明できよう。

大脳の表面を包む新皮質が哺乳類とくに人類で発達したことは、この部分が創造的行動・適応行動などを支配し言語の中枢を含んでいることから、ヒトが「精神的動物」または「心の動物」とも呼ばれるゆえんである。情報伝達手段として最も発達した言語活動をを行うことにより、個体間の精神的な連なりをより密接なものとし、高度な社会を形成させる基礎ともなっている。男女の結合も、言語という手段によって、単なる性欲の充足や生殖行為のみならず、結婚という社会組織の基礎を作り、ひいては社会的経済的基本単位から、育児、教育など精神的な安定を求める場ともなることが可能になる。ヒトの用いる言語こそ情報伝達の最も高度に発達した方法であることは間違いないが、生物学的な意味でこ

の問題を考える上で、人間に限らず他動物の場合を調べることも意味がある。同じ人類でも、民族による言語の比較などの研究は勿論であるが、原始人類・人類に最も近縁な霊長類さらに、もっと下等な動物のコミュニケーションについても最近興味深い研究が行われている。神経中枢をはじめ体制の最も複雑に進化した人間が言語という最も複雑な情報伝達をすることはいうまでもないが、下等動物のなかには、言語とは違った方法でかなり高度のコミュニケーションを行うものがあり、フリッシュなどがミツバチを用いたみごとな研究の成果はよく知られるところである。

フリッシュと共に、動物行動学という分野で業績をあげたローレンツ、ティンバーゲンは一九七三年ノーベル賞を受賞することとなり、動物行動学が急速に注目されるようになった。そこで、この学問をもとり入れた新しい立場で人類学も進める傾向が生れている。例えば人類の持つ特徴の一つとして文化を持つ動物と考えているが、行動学の立場から、文化を人間以外の動物にまで及んで検討してみるのである。もちろん、このような新しい研究手段を人類学に取入れる方法は行動学に止まらず、近時飛躍的な発展をみせている遺伝学や分子生物学などをはじめ広く関連分野の学問と密接な関係を持ちつつ推し進めなければならない。

文化学科が発足して今年で九年目、自然人類学ゼミとしても百本を越す卒業論文が提出された。その題目はこの学会報(一三二頁以下)に掲げてある通りだが、昨年度までの九六本を内容別に分類して一応、別表の如き十一項目に分けることができる。

この結果を見ただけで全体を論じることには無理だが、一応の傾向として、自然人類学または人間生物学として当然考慮されるべ

き範囲に、学生諸君の興味の対象も広くわたっていることで、初めに心配したように、ゼミの性格を理解できないからといってまるで無関係なテーマが現われることはなかった。密度の濃い立派な内容の論文も数多く見られることができて何よりも喜ばしく思っている。論文の中でも行動学に属したものが一番多く、全体の約二五％になるが、これは、この学問自体が比較的新しい分野で、学生諸君にアピールするようなものが多かったからと想像している。

人類の危機が叫ばれ、ライフ・サイエンスなる科学の登場により広い学問領域が有機的に関連して人間・生命の研究を行うことが盛んとなっている今日、まず、生物としての人類を理解することなくして解決できる問題とは考えられない。「人間生物学」の貴重な所以である。(専任・自然人類学)

内容別に分類した卒論のテーマと学生数

内 容 項 目	学 生 数
遺 傳	10
行 動	24
生 理	17
進 化	7
寿 命・老 化	2
社 会	10
自 然・環 境	4
性 現 象	5
生 態	6
生 命	3
そ の 他	8
計	96名